

FD 通信 No.15

飯田女子短期大学 FD 委員会

地に足を付けた FD 活動

FD 委員長 三浦弥生

「FD 活動とは Faculty Development の略で、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みのことです。本学の活動としては、授業改善アンケート及び学内公開授業の実施と評価、FD 研修会や講演会を実施しています。活動の詳細は毎年 FD 通信を発行していますのでご覧ください。」と、春の新任教職員研修で毎年委員長として FD 活動の説明をしてきました。説明する立場になって初めて FD 活動とは何であるのか、どうあるべきなのかを真剣に考えるようになりました。新たに求められる活動を模索する中で、これまでの活動が学外の大学評価指標や、他学の FD 活動と比して内容に落ちなく良くできた取り組みになっていることにも気がきました。本学のこれまでの FD 活動、それを牽引する FD 委員会の活動は学内から一定の評価をされ得るものだと感じています。

さて、昨今の教育改革では主体的、対話的で深い学び、すなわち「教える側が主体となる」から「学習者が主体となる」への変換が求められるようになりました。この「学習者が主体となる」とは単にワークを行うことではなく、学生に思考を促すことであり、今年度の FD 研修会では「思考を促す発問」に目を向けた研修を実施し、多くの反響を得ました。実施するにあたり授業研究サークルの協力を頂きました。改めて感謝申し上げます。

最後に、FD 通信の最初の発行は 2007 年 7 月です。発刊にあたって、高松信英前学長から「今あらためて、本学の教育の目ざすもの。」として、このような御言葉を頂いています。

「教員は、学生が短大生活を通し、もともと持っていた輝きを一層美しく輝かせて社会に出ていける力を 育む、そんな教育をしてほしい。そして学生は、駄目な自分にとどまらず、人生は点数で決まらないこと を実証できる生活をこの先自らの力でつくっていく、そんな力を身につけてほしい。」

本学 FD 活動が、「本学の FD 活動」として、評価のための活動ではない真の活動、地に足を付けたものであること、本学の教育が目ざすものを見据えて、FD 活動として取り組んでいくことが今後の課題ではないでしょうか。

目 次

タイトル	FD 委員長	三浦弥生	ページ	1
<FD 研修会> よい発問 「FD 研修と唯一の道」	授業改善サークル長	奥井現理	ページ	2
<研修会に参加して>	家政学科 原義隆/看護学科	平井義一	ページ	2.3
<FD4 コマまんが>		菱田博之	ページ	3
<FD 研修会開催に向けてのアンケート結果>			ページ	4
<FD 研修会アンケート結果>		高木一代	ページ	5
<キャンパスライフに対するアンケート（令和 4 年度）実施結果より>	教務課長	山口正之	ページ	6

<FD 研修会> FD 研修と唯一の道

発問のことをFD研修会では話したわけですが、目標体系（これは同時に評価体系でもあります）が確立していないとそれを達成する発問を考えようがないということに何人かの人は気づいたことでしょうか。授業の準備はそこから始まります。目標がはっきりしていないと発問を考えようがないし、だいいち何を達成しているんだかわからないのですから、評価のしようがありません。そういう何を達成しているのかボンヤリした授業を15回受けさせられた果てに、思い付きのテストを受けさせられる学生はたまったものじゃありません。小学校の先生が「めあて」とかいちいち毎時間に提示しているのを見聞きしたことがありますか。あれはそのような理不尽を防ぐためにやっているのです。あれも形骸化していてそのような趣旨を理解せずにやっている人のほうが多いようにみえますが、それでもやらないよりは多少マシな授業になることのほうが多いでしょう（「めあて」は虎の巻に書いてありますし、テストも同じ虎の巻業者が作っているからです）。

そうしたわけで、わたしがFD研修会でお話したことは、必要なパーツのひとつをいくらかマシにするという話にすぎないわけです。車でいうとエンジンにだけすこし油をさしたようなものです。エンジンの回転だけがよくなっても、駆動系なりフレームなりがガタガタで思った方向に進まないのでは話になりません。ともあれ、発問が何であるか、いい発問とはどういうことかはお話できましたので、今後はみなさんご自分なりに工夫することはできるでしょう。向上心さえあれば仲間と発問を磨き合うこともできるでしょう。みなさんの授業上達を祈念しています。

ここは学校なので、ほんとうに「手厚い」というのは十分に準備のされたよい授業を提供し続けることです。温泉の評価に泉質でなくてアメニティグッズの充実などを挙げるようなマネをして問題がないわけではありません（そんなものを有難がる層は温泉などいづれ飽きます）。学校も授業で学生を引き付けるのであれば、いづれ社会の中に居場所はなくなるでしょう。

（文責 奥井現理）

「FD 研修会に参加して」

家政学科 原義隆

介護教員として着任し、一部分ではありますが前期の授業で教壇に立つ機会を頂きました。しかしながら、授業の展開方法については知識が浅く、あれこれ伝えようとするあまり単なる説明で終わってしまいました。また、実技演習の場面でも度々行き詰ってしまうことがありました。学科専攻の先生方より都度ご指導を頂いてきましたが、自分でも何を伝えたいのか整理ができておらず、学生との双方向のやり取りもできていませんでした。

今回のFD研修会では「発問をつくることができる」という目標を達成するため、①発問とは何かを知ることができる、②上手な発問とは何かを知ることができる、③発問を自分でつくることのできるといった小さな目標を設定し、段階的に進められました。「発問」とは目標を達成できるための思考を促し、学生がイメージしやすい内容で発問を行うことが大切であり、「はい」「いいえ」で答えられるアンケートのような内容の物は発問とは言い難いということ学びました。

後期は15回の授業を担当します。また、学外でも体験授業などを行う機会があります。自身の担当する介護予防論の授業において、1コマを例に考えてみると「転倒」「骨折」「虚弱」などのキーワードが出てくる回では、「どうしたら転倒や骨折を予防できますか」など、学生がより考えやすく、思考を促すことができるよう、今回の学びを活かしていきたいと思います。

FD4コマ ひしだ



www.comipo.com

「FD研修会に参加して」

看護学科 平井義一

今回、「授業の進め方の基礎」の講演を聞き、発問とは何かや上手な発問の方法などについて学ぶことができ、自身の指導についても振り返る機会となった。

授業や実習の場面では、教員が学生の思考の整理や物事に対して深く考えながら目標が達成できるように支援しなければならない。その場面において、質問ではなく発問を用いる必要がある。講演会で発問とは、目標を達成させるために考えさせる問いであり、その問いを答えるために思考することが、目標を達成させる見込みのあるように問いを作らなければならないとされていた。例えば、はい・いいえで答えられるものはアンケートのようになり、思考には至っていない。また、発問が漠然としてしまうと考えにくくなり、選択肢が広がることで回答者が迷ってしまい見当違いの回答となることがある。講演ではそれらについて中耳炎を例にあげて説明されていた。学生に菌が耳管から入り込んで炎症が起ることを理解させることが目標ならば、「菌が入るとどうなりますか」という発問よりも「菌はどこを通過して中耳に入りましたか」など学生が中耳炎を発症するまでの過程も考察できるようにする。そうすることで、学生は発症までの過程も含めて理解でき、より思考を深めることができる。このことから、目標に対してある程度具体的な発問の方が回答者も思考の整理や物事に対して深く考えることができることを学べた。また、発問により理解が進むことで学習効果が高まり、やる気にも繋がることを感じる事ができた。

私も今年度から教員になり、短い期間ではあるが学生と関わる中で、目標に対して適切な発問をおこなっていたのかを講演会を通して振り返る機会となった。今後はこの学びを活かし、上手な発問で学生が目標を達成できる思考を促しつつ、楽しく学べる機会を提供していきたい。



～FD研修会開催に向けて～

令和4年度のFD研修会開催に向けて、5月に事前アンケートを実施しました。アンケートの質問事項は

質問1 授業内容を改善するために知りたいことはあるか。
質問2 授業方法を改善するために知りたいことはあるか。
の2つでした。

皆様から寄せられた意見ですが、

「質問1 授業内容を改善するために知りたいことはあるか」では、

- ・知識の詰め込みにならない授業（覚えてもらいたいことが多い、内容を精査しようと思うが難しい）
- ・課題の出し方として、事前学習や授業の振り返りが出来るような課題の出し方
- ・基礎力（読解力や計算力）がない学生への対応をどうすればよいのか。基礎力がないと授業の内容になかなか進めない。（本年度は寺子屋カフェ国語編として実施されました）

「質問2 授業方法を改善するために知りたいことはあるか。」では、

- ・発問で思考を促す方法として、自ら疑問に思う発問で思考を促し、学生同士が教え合い、学び合う協働学習に発展させる方法。

- ・主体性を引き出す方法として、自分で考える力を養うことの出来る授業の方法。
- ・授業の組立方法
- ・協働学習の方法
- ・効果的な教材の活用方法
- ・リモート授業の実践方法

などのご意見をいただきました。

FD委員会で検討した結果、令和4年度のFD研修会の内容はこれらのいただいた意見の中にあった、「質問2 授業方法を改善するために知りたいことはあるか」から、「発問で思考を促す方法について」に決定しました。

FD研修会

事前アンケート結果 [2022.5月実施]

1. 教育(授業)内容改善のため知りたいこと

知識の詰め込みにならない授業

内容を精査しようと思うが難しい
覚えて貰いたいことが多い

課題の出し方

予習(事前学習)
復習(分からないことをそのままにしない・振り返りができるような)

基礎力(読解力や計算力：比の計算、割合など)がない学生対応

本題の授業内容になかなか進めない現実がある

2. 教育(授業)方法改善のため知りたいこと

発問で思考を促す方法

発問で思考を促し協同学習に発展させたい

主体性を引き出す方法

自分で考える力を養うことのできる授業

授業の組み立て方法

アセスメントを強めることのできる

協働学習の方法

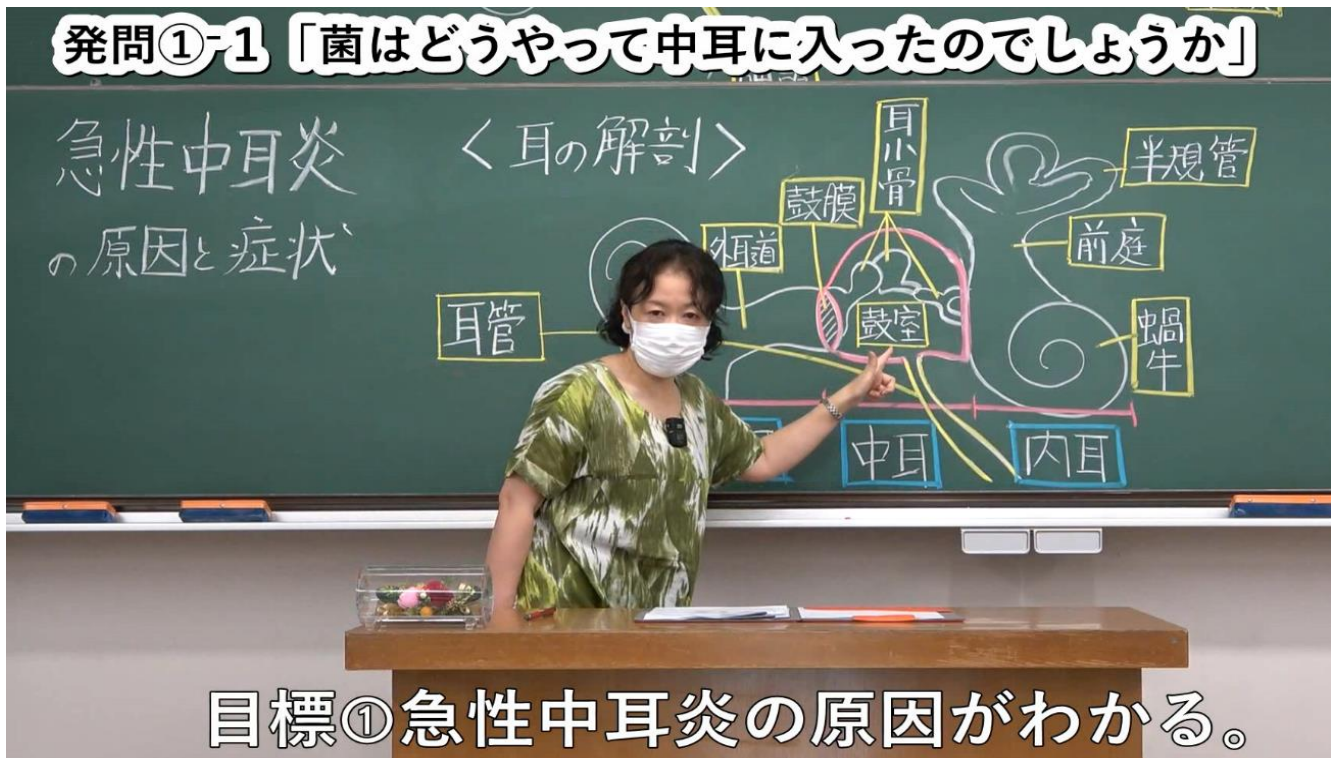
基本的な知識の定着を目指す教科でのやり方

効果的な教材活用方法

ipad(eテキスト)・教科書(序章)

リモート授業の実践方法





～FD研修会アンケート結果～

FD研修会開催後に行なったアンケートの結果をお知らせします。(有効回答数 39)

質問1 研修会の時期は適切であったか。

適切である 38 (97%)

適切ではない 1 (3%)

質問2 発問とは何か理解できましたか？

理解できた 39 (100%)

理解できなかった 0 (0%)

質問3 今回の研修会の内容について、ご意見・ご感想を記入して下さい。

・発問とは何か、よい発問の仕方を学ぶことができました。教育の現場で働く身として、学生自身に考えさせ、目標を達成してもらうことは重要だと思うので 授業をする時にはどうしたら目標を達成できるかを考えて発問をしようと思います。

・奥井先生と三浦先生の掛け合いが面白く、とても楽しく学ばせていただきました。内容も比較動画やパワーポイントでわかりやすくまとめてくださっていたので、より理解が深まりました。

・このような研修は定期的実施すべきだと思います。教員として必須です。

研修会の目的でもあった「発問」について、100%皆さんが理解できたという結果を得ることが出来ました。また、今回の研修会の内容について、ご意見・ご感想では多くのご意見をいただきましたが、大きくまとめると「発問とは何か、よい発問の仕方を学ぶことができました」「奥井先生と三浦先生の掛け合いが面白く、とても楽しく学ぶことができました」「定期的実施して欲しい」の3つとなりました。これらのアンケート結果より、本年度のFD研修会は皆様に満足していただけたと分析しております。ありがとうございました。

(文責 高木一代)

キャンパスライフに対するアンケート（令和4年度）実施結果より

教務課長 山口正之

キャンパスライフに対するアンケート（令和4年度）をSD委員会が中心となりオンラインで実施した。調査期間：令和5年1月18日～令和5年1月25日。質問内容：『対象者の属性』『サポート体制』『教育施設・設備』について。例年行っていた『入学後の能力や知識の変化』『学生生活等の満足度』『教育に対する満足度』については、短期大学調査で実施したため今回の調査では行っていない。対象学生数438名、回答数355、回答率81.1%（昨年度85.5%）だった。

『サポート体制』について、昨年度より「Web休講サイトの利用状況について」調査を行っている。今年度の結果は、43.9%（昨年度41.3%）が利用していない、37.2%（昨年度43.2%）が休講サイトを知らないと回答しており、8割程度の学生が利用していない現状となった。休講連絡について、もっとわかりやすくしてほしいと意見があった。

令和5年度より、UNIVERSAL PASPORT（UNIPA）を導入する。UNIPAでは、オンライン上で教員・職員からの連絡、休講・補講、成績等の確認ができるようになる。休講・補講の連絡方法が変わるので、UNIPAの利用状況について調査を行っていききたい。

学生便覧の活用は、今回65.6%が活用していると回答しているが、まだ、学生への周知が不足していると感じる。例年、入学時のみ冊子を配布しており、最新の情報が得られていないのではないかといい意見があがっている。次年度は、共学化するため在学生へ配布を行う。今後、在学生が活用しやすく、新しい情報を確認できるよう、オンラインでの掲載も視野に入れ活用方法を検討していききたい。

事務職員への満足度に関しては、全ての部署で90%を超える結果となった。個別意見があがっているので、満足度の数字だけにとらわれず、学生が満足する対応について各部署取り組んでいききたい。

今回、飯田女子短期大学として最後の調査となった。令和5年度より共学化し、学生への対応も様変わりすることが予想される。今後も、学生が本学で学べて良かったと感じられるよう、学生対応を行っていききたい。



編集後記

FD通信15号をお届けします。お忙しい中、寄稿にご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。今回はFD研修会で学んだ「よい発問」について取り上げました。授業内容や方法の改善に役立てていただけたらと思います。本通信で多くの情報が共有され、今後のFD活動がより充実したものになることを願います。

（編集担当：菱田博之 柄澤八代衣）

飯田女子短期大学FD通信 No.15（発行日 2023年3月31日）

FD委員会委員長 三浦弥生

委員 高木一代 菱田博之 山下梓 山口正之 柄澤八代衣

※FD通信へのご意見ご感想をお待ちしております。 fd@iida.ac.jp